

『男らしさ』と男尊女卑依存症社会

10月5日(土)にWith You さいたまで開催した「男性によるトークセッション」では、ライターの武田砂鉄さん、西川口榎本クリニック副院長(精神保健福祉士/社会福祉士)の斉藤章佳さんをお招きし、「『男らしさ』と男尊女卑依存症社会」をテーマにご対談いただきました。今回はその一部をご紹介します。

男性優位の社会構造 —日本は男尊女卑依存症社会

武田 斉藤さんは、ここ(With You さいたま)は2回目ということ
で。

斉藤 2回目です。5年前に、砂鉄さんと痴漢対談(*1)を。

武田 そうでしたね。今回のタイトルの半分にもなっていますけど、斉藤さんがお出しになられた『男尊女卑依存症社会』という本の帯に、エッセイストの小島慶子さんの名前があります。これは小島さんとの会話ででてきた言葉なんですか？

斉藤 そうです。「さよなら! ハラスメント」(*2)という本で、小島さんと依存症に関する対談をした時に、「もう日本は何かの依存症になっているんじゃないでしょうか」「何の依存症ですかね」「男尊女卑への過剰適応じゃないでしょうか」という話になり、その時『男尊女卑依存症社会』という言葉が生まれました。

武田 それは自分で口にした時に、「あ、確かにそうかもしれないな」という感覚があったんですか？

斉藤 ありましたね。私は依存症や性加害の臨床にかかわって、その根本にある生きづらさってなんだろうと考えた時に、ジェンダーの問題にぶつかったんですね。彼らは男尊女卑の価値観が根底にあって、それを行動化している人たちです。私自身も『男らしさ』や『男尊女卑』の価値観に振り回された時期があったので、その言葉を使った本を書きたいと思い、この『男尊女卑依存症社会』を書きました。

「男尊女卑依存症社会」の定義なんですけど、男尊女卑の価値観に過剰適応し、その価値観で生きるのは苦しいにも関わらず、それがやめられない状態。また広義の意味では、「有害な男らしさ」や「有害な女らしさ」という社会から期待された過剰なジェンダー役割にとらわれ、それが手放せない状態を指します。

武田 そのまま日本社会といってもいいような定義ではありませんよね。

斉藤 私は今、たくさん「加害者」と呼ばれる人とかかかわっていますが、これまでかかわってきたおおよそ3,000件のデータをまとめているら、四大卒で、サラリーマンで、家族がいて……という属性の人がすごく多いんですよ。盗撮の人もそうなんですけど。彼らは基本的に私となら変わりなくて、それで自分も追いつめられたりした時に、自暴自棄になって、人を傷つけることで自尊感情や自己肯定感を高めるみたいな可能性はあるようになってきました。

私の故郷は滋賀県の非常に男尊女卑の強い地域で、生まれた時から、あなたは待望の男の子だから、長男だから、と聞かされて育ちました。小学校高学年くらいの時に、「人間は生まれた時に、すでに価値が決まっているんだ。男に生まれてよかった」と思いました。自分にはそんなふう、まるで呪

いでもかけられているように男尊女卑の価値観が刷り込まれていたんで、ずっと脳内に残っている部分もあると思います。

武田 僕は「男らしくあれ」と言われたことが一度もないんですよ。でも、僕が「マチズモを削り取れ」という本で書いたのは、そうはいつでもこの社会自体が男尊女卑で、男性優位に作られているから、自分がどういう意識でいようと公共のさまざまな空間に置かれた時に、自分は非常に優位な立場であるぞと。いろいろと勉強したり、原稿を書くようになってから、そのことをものすごく自覚するようになりました。ただ、この5年から10年の間に、語られ方は徐々に変わってきたのかなとは思っています。

(*1)2019年3月開催 メンズプロジェクト講座「男同士が語る どうしたら痴漢をなくせるか」(With You さいたま主催)において、斉藤章佳さん、武田砂鉄さんにご登壇いただきました。
(*2)小島慶子 編著『さよなら! ハラスメント —自分と社会を変える11の知恵』(晶文社)2019年

依存症 —生きづらさや苦痛を一時的に緩和する行為

武田 斉藤さんは高校時代、バリバリの体育会系のサッカープレイヤーだったとか？

斉藤 バリバリです。バリバリの競争社会。最初はそこそこよかったですね、プロになりたいと思ってブラジルに留学もした。でも、大きな怪我をして、手術しなければいけなくなって。そこから坂道を転がり落ちるように競争からドロップアウトしていきました。

武田 僕は中高時代、どっちも部活がうまくいかなかった人間で、高校時代も弱小バレー部で、女子バレーに「なんであんな弱小男子バレーにコートを貸さなきゃいけないんだ」と言われてたくらいなんです。中学のサッカー部時代も、ずっと控えに甘んじてまして……。でもこうやって文章を書くようになって、控えの目線っていうのは、結構大事なことだったんだと、あとになって思っています。

斉藤 私はずるずる転げ落ちていく時、なんとか底辺まで落ちないために、過食嘔吐を始めました。いわゆる摂食障害です。ボクサーとかも減量でよくチューイングっていう、胃に入れずに吐くというのをやるんですが、その行為を怪我の間ずっとやっていました。それをしてる間は体重、数字にこだわるので、今の自分のつらさを見なくていいというか、感じなくていい。今考えると依存症(アディクション)の状態です。でも、次は逆の膝も怪我をして、もう終わったな、って。それでもっとひどくなっていきました。体重をコントロールするためにやっていた行為だったんですが、次第に自分の生きづらさやしんどさを見なくするための、自分の中にある苦痛を一時的に緩和するための行動になっていきました。



武田 それはいつ頃、打破できたんですか？

斉藤 サッカーをやめて、競争から降りてからです。私にとってサッカーは酔っぱらうものだったので。

武田 酔っぱらうものとはどういうことですか？

斉藤 私は勉強がそんなにできなかったんで、サッカーは優越感を感じられる唯一のもので、今考えると「酔っぱらってる」ものだったんです。でもそれが奪われたので、これからは「しらふ」で生きないといけない。しらふで生きるってすごくつらいんですよ。自分の気持ちを支えるものがなくなって、裸で道を歩いているような感じでした。

武田 一概には言えないですが、高校・大学とスポーツで活躍した人たちが就職活動で優位だと。なぜかといったら、彼らはやれていったらやるし、しゃがめていったらしゃがむ。そういう人たちが社会を運営していく中に入っていくわけです。体育会系社会っていうのは、まさに「男尊女卑依存症社会」と直結してるってことですよ。

スクールカーストと盗撮男子 —「男」として承認される経験

斉藤 最近、盗撮で児童相談所や警察が介入する相談がすごく増えてきました。年齢の下は小学6年生、10代で多い層は高校生です。ひとつ印象深い事例があります。その男の子は共学の進学校、高校一年生のAくん。時期は二学期が始まるくらいで、クラスの中では男の子のグループ、いわゆるスクールカースト上位と呼ばれるグループができていました。AくんはそのグループのBくんから「隣のクラスにかわいい子がいるから、スマホで撮ってきてくれ」と頼まれます。Aくんは嫌だったんですけど、断るとクラスでやりづらくなるな、と。過去にいじめられた経験があったので、またいじめのターゲットにされたくないという防衛本能も働いて、スマートフォンで対象の女の子の写真を撮ったんです。



その画像をBくんに見せたら、「LINEで送ってくれ」と。ここで彼はスクールカースト上位の男の子のLINEグループとつながることができたんです。それは彼にとって、非常に大きな体験だったみたいで。

武田 それは成功体験みたいな？

斉藤 そう。スクールカースト上位の男の子から「男として承認された経験」になったわけですよ。「お前、勇氣あるじゃん」「男だな」と言われたそうなんです。でも要求はエスカレートしていきますよね。そのうちスカートの中の下着まで撮るようになって……。最終的には、朝の通学の電車内で盗撮をして、見つかった、警察に引き渡され、逮捕されました。スマホには数千枚の画像や動画があったそうです。盗撮は短期間で常習化するという特徴があって、彼もそうでした。「盗撮、本当にしたかったの?」と聞いたら、彼は「最初はしたくなかった」と。「なのに、なんで続けたの?」と聞いたら、「男から男として認めもらった気がしました」と。私は高校一年生の男の子が「男らしさ」に価値を置いていることにびっくりしたんです。若い人にとって「男らしさ」って過去の、昭和世代の価値観だろうと思っていたら、いまだに一定の価値があって、今のジェンダー平等の価値観と、旧来の社会もしくは親や同世代の男の子たちから求められる「男らしさ」の価値観との間で、もがき苦しんでいる姿をそこに見ました。

武田 盗撮をするというのは相手の女性に対する加害性があるわけ、そこまでして認められたいとか、「男らしい」と言葉欲しがると感じているのは、なかなか理解しがたいものがあります。

斉藤 女性の身体の一部を勝手にモノ化して、それをホモソーシャルなコミュニティで絆を強めるために消費する。加害行為が反復される、つまり行動を繰り返すことが強化されていった要因は、確実に「承認」なんです。いわゆる「強い」と言われている男性、もしくは男性グループからの承認。それが教科書になって、行動が更新されていく。これはもうまさに依存症、アディクションのメカニズムと同じです。こういう構造が若い世代にも、そして似たようなものが私たちの世代にもあって、それが脈々と形を変えて続いているんだなと思いました。

「男尊女卑依存症」からの回復 —「弱さ」でつながる

斉藤 私が摂食障害の話ができるようになったのは、依存症の臨床にかかわるようになってからです。依存症の回復の神髄は正直になることなので、自分の弱さを正直に打ち明ける。聞いていた仲間たちは、それで力をもらえる。「あなたの弱さが他の人の力になる」というメカニズムが回復の中には働いているんです。

社会人になって一年目の時に、「回復のロールモデルを知らない」と回復が信じられなくなるから、AA(アルコール依存症の自助グループ)に行きなさい」と言われたんです。私はアルコール依存症ではないので、自分の成功体験や、うまくいった話しかできませんでした。その帰り道、10年くらい絶酒した参加者の方から、「斉藤さんの成功体験とか強い話を聴きたいわけじゃないんだ。あなたの弱い話が聴きたいんだ」と言われたんです。その時、金槌で頭を殴られたような気がしました。次に行った時、私は初めて自分の摂食障害の話をしました。親と同世代くらいのおじさんたちが、やっと話せたね、みたいな顔をして、にこにこしながら接してくれて。すごくあたたかい感じがしたんです。帰り道でも、心のあたりに、あったかいものが残っていました。アルコール依存症の方って、心の穴をアルコールで埋めてきたんです。でもそれができなくなって、彼らは自助グルー



武田砂鉄さん
(ただだ ざてつ)

ライター
1982年生まれ。出版社勤務を経て、2014年よりライターに。2015年、『紋切型社会』で第25回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。他の著書に『日本の気配』(晶文社)、『わかりやすさの罪』(朝日新聞出版)、『偉い人ほどすぐ逃げる』(文藝春秋)、『マチズモを削り取れ』(集英社)、『べつに怒ってない』(筑摩書房)、『今日拾った言葉たち』(暮らしの手帖社)、『父ではありませんが』

講師プロフィール

武田砂鉄さん
(ただだ ざてつ)

ライター
1982年生まれ。出版社勤務を経て、2014年よりライターに。2015年、『紋切型社会』で第25回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。他の著書に『日本の気配』(晶文社)、『わかりやすさの罪』(朝日新聞出版)、『偉い人ほどすぐ逃げる』(文藝春秋)、『マチズモを削り取れ』(集英社)、『べつに怒ってない』(筑摩書房)、『今日拾った言葉たち』(暮らしの手帖社)、『父ではありませんが』

斉藤章佳さん
(さいとう あきよし)

西川口榎本クリニック副院長(精神保健福祉士/社会福祉士)
1979年滋賀県生まれ。大卒後、アジア最大規模といわれる依存症施設である榎本クリニックにソーシャルワーカーとして、約20年にわたりアルコール依存症を中心にギャンブル・薬物・摂食障害・性犯罪・児童虐待・DV・クレプトマニアなど様々なアディクション問題に携わる。その後、2024年10月から現職。専門は加害者臨床で現在まで3000名以上の性犯罪者の治療に関わり、性犯罪被害者の家族支援も含めた包括的な地域トリアートメントに関する実践・研究・啓発活動に取り組んでいる。また、都内更生保護施設では長年「酒害・薬害教育プログラム」の講師をつとめている。小中学校では薬物乱用防止教育をはじめ、大学でも早期の依存症教育に積極的に関わっており、全国での講演も含めその活動は幅広くマスメディアでも度々取り上げられている。東京都痴漢被害実態把握調査委員、一般社団法人痴漢抑止活動センターアドバイザー。

マチズモを削り取れ

武田砂鉄 著
集英社(2021年) 請求記号367.21/マ

本書は、担当編集者Kさんの怒りを著者である武田砂鉄さんが聴き取り、その怒りを引き受け、実際に町に出て調査し、考察するという「マチズモ=男性優位主義」実態検証本である。Kさんから送られてくる短文や、ふたりの会話から生まれた疑問を基に、路上、電車、トイレ、会社、結婚式場、書店、飲食店……など、公共空間における特定の場面や状態に残存するマチズモについて、事細かに考察していく。

*上記の本は、With You さいたま 情報ライブラリーにて、貸出しをしています。

2

3

4